

「みえを知る旅Ⅲ」

参加者募集!!

榊原のお風呂にゆったりつかって、
三重の歴史を学びませんか。

「日本人の心のふるさと」とも称される伊勢の神宮。都から伊勢の入口に湧く榊原温泉は、古くより伊勢参拝に際し、身を清める「湯ごり」の地としての役割も担ってきました。その榊原温泉で三重の歴史を学び、「いにしえの時」と「温泉のお湯」にゆったりと浸る時間をお楽しみください!

湯元榊原館ではこれまで2回、「みえを知る旅」として、三重の歴史・文化等について研究されている方々を講師に迎え歴史や文化風土を学ぶ場を提供しています。

この度の「みえを知る旅Ⅲ」では“三重の女性編”として実施いたします。

第1回 「倭姫命（やまとひめのみこと）の御巡幸から」

講師 皇學館大學名誉教授 岡田 登先生

開催日 4月24日 10:00~12:00

古代の大倭（やまと）王権が、皇祖神として祭っていた天照大神（八咫鏡）を、第11代垂仁天皇の時（3世紀末）に、倭姫命が大倭国（奈良県）から「常世（とこよ）の浪、重浪帰（しきなみよ）する国、傍国（かたくに）の可怜（うま）し国」である伊勢の五十鈴川の辺に遷し、伊勢の大神宮の祭祀が始まります。今年は、伊勢市の倉田山に倭姫宮が創建されて100年の佳節を迎えます。本講座では、伊勢を世界に誇る宗教的聖地にした恩人の倭姫命の事績についてお話しします。

第2回 「式年遷宮の復興と慶光院上人」

講師 皇學館大學文学部長 国史学科教授 岡野 友彦先生

開催日 5月29日 10:00~12:00

持統天皇4年（690）に始められて以降、20年ごとに行われてきた伊勢神宮の式年遷宮が、戦国時代、100年余りにわたって途絶したこと。その復興に尽力したのが慶光院清順上人をはじめとする尼僧らであったことはよく知られています。

それでは、神道の総本山ともいべき伊勢神宮式年遷宮の復興のために誰よりも努力したのが仏教関係者の、しかも女性だったのはなぜなのでしょう。その問いについて皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

第3回 「高松院 - その時代背景および本山のその後の時代の変遷を見る」

講師 真宗高田派本山総務 藤谷 知良先生

開催日 6月12日 10:00~12:00

藤堂高虎の次女（糸姫）に始まる真宗高田派本山との関わりをはじめ、今日まで800年続く専修寺と“人の動きや出来事”と絡む時代の変遷を俯瞰的に見ながら、そこで私たちに示唆するものを見て、あらためて現在（いま）を考えたいと思います。

※裏面に続く

第4回 「全国で知られた 孝女 登勢」

講師 三重郷土会常任理事 浅生 悦生先生

開催日 6月26日 10:00~12:00

江戸時代の後期、津藩に「御領下第一抜群の孝心」「抜生の孝女」として全国に知られ、賞賛された娘がいました。安濃郡連部村の「登勢」です。妾腹の子として生まれた登勢は幼くして何度も養女に貰われるなか、必死に連部村の貧農夫婦を支えていました。

大塩平八郎も感涙したという登勢の孝養や藩主高兌のとった姿勢はどのようなものだったのでしょうか。一方『孝女登勢伝』や近代の登勢顕彰をみると、そこには特別な背景があったことがよみとれます。

第5回 「伊勢古市の妓楼と歌舞伎 ～「千束屋」女主人・山田里登の商才～」

講師 皇學館大学研究開発推進センター助教 佐川記念神道博物館学芸員 小林 郁先生

開催日 7月24日 10:00~12:00

伊勢の内宮・外宮の中間地点に位置する古市という町は、かつて多くの妓楼が軒を連ねた全国屈指の歓楽街であり、その賑わいは江戸吉原・京島原に並ぶほどでした。また、江戸時代初期から芝居小屋が常設されたことから「伊勢歌舞伎」興隆の地として栄え、多くの参宮客に親しまれると共に、「上方歌舞伎の登竜門」として歌舞伎役者の間でも重要な場所に位置付けられていました。

山田里登は古市妓楼のひとつ「千束屋」の初代主人・市右衛門の妻で、夫と共に一代で評判の本店を作り上げ、跡継ぎの甥夫婦・夫の死別後は茶屋商売を廃業し、伊勢歌舞伎の貸衣装店を開業。「千束屋」はその後、明治後期まで繁盛するに至っています。本講座では、並々ならぬ商才で伊勢古市の妓楼・歌舞伎を支えた、「千束屋」の女主人・山田里登についてご紹介します。

第6回 「伊勢の文学者 荒木田麗女の生涯と功績」

講師 京都産業大学 文化学部准教授 雲岡 梓先生

開催日 9月4日 10:00~12:00

伊勢神宮御師の妻、荒木田麗女（1732~1806）は、平安時代を舞台とする恋物語・歴史物語・国学・和歌・連歌・漢詩などを幅広く手がけ、約百種類四百巻もの作品を著しました。麗女が活発な創作活動を行うことができた背景には御師の妻という立場が関係していました。

また、男尊女卑の思想によって女性が男性にへりくだるのが当然であった江戸時代に生まれながら、麗女は男性学者と文学上の議論を行うこともありました。松阪の国学者本居宣長とは平安時代の物語を執筆する際の文法・言葉遣いなどをめぐって激しい文学論争を行います。麗女は宣長を「田舎のえせ書生」と罵って、終には絶交するに至りました。苛烈に生きた麗女の生涯と、その功績についてご紹介いたします。

オプション企画（講座受講生を対象とします）

「真宗高田派本山の見学」を6月に予定しています。（詳細は確定次第ご連絡します）

主催 湯元榊原館

連携・協力 道の駅 津かわげ

会場 湯元榊原館（津市榊原町 5970 番地）

（安全面への配慮から変更となる場合があります）

会費 6回一括 6,000円（当日の日帰り温泉入浴料含む）、

募集 定員 70名（先着順）

申込方法 別添申込書にてFAXにてお申し込みください。

FAX 059-252-0792（湯元榊原館 担当 藤田まで）

締切 **4月14日（金）**

※申込書は、湯元榊原館・道の駅 津かわげ・津市観光協会・三重県観光局（三重県庁 1階）三重県観光連盟に置いてあります。

連絡先 湯元榊原館 TEL 059-252-0206（担当 前田・藤田）